

岡崎市立額田中学校

校長室だより

R8. 10. 1

no. 5

「額中タイムス」巻頭言より



Challenge・Respect・Solidarity
敬・愛・信

「中止か、決行か」

修学旅行1日目が終わろうとしていた9月7日（日）午後8時45分。

宿泊先である「シェラトン・グランデ・トーキョーベイ・ホテル」の一室で、私と3年主任の鶴田先生は、テレビ画面を見つめながら黙り込んでいた。画面には、「大雨の影響により伊豆諸島に土砂災害特別警報が発表されたこと」、「翌日には東京でも線状降水帯が発生する可能性があること」、さらに「都内の公立小中学校が休校措置をとること」などの情報が、次々と流れていた。

「生徒を危険にさらすわけにはいかない」。

そう考えれば、ディズニーも含め、翌日の行程をすべて中止するという判断もあった。しかし、3年担任の願いはただ一つ、「この子たちに、修学旅行のよい思い出を残したい」。その思いを胸に、これまで綿密な計画を立ててきたのである。

そのとき、鶴田主任が言った。

「できることとできないことを整理しましょう」。

公共交通機関が計画運休を行うのであれば貸切バスを利用する。屋外施設は中止し、屋内施設を中心に見学する。午前中の大雨に備えながらも、午後の活動は状況を見て判断する。

私たちは課題を一つずつ整理し、安全を確保しながら実施できる方法を探り続けた。

当日は予想どおりの大雨だった。

先生たちはびしょ濡れになりながらも力を合わせ、生徒たちを支えた。そして生徒たちもまた見事だった。どの学級も担任の指示をよく聞き、落ち着いて行動することができた。その結果、予定した屋内施設の見学を終え、ディズニーランドでの活動も実施することができた。雨の中ではあったが、生徒たちの笑顔を見ることができ、本当によかったと思う。

3日間の全日程を終え、無事に学校へ戻ることができた。帰着した私たちを、多くの保護者や先生方が温かく迎えてくださった。その光景は今でも心に残っている。修学旅行の成功は、生徒たちの努力はもちろん、多くの方々の支えがあってこそ、実現したものである。

帰着式で鶴田主任は、「修学旅行はこれで終わります。この成功を次につなげてほしい」と話した。修学旅行はゴールではない。ここで得た仲間との絆や思い出、そして困難を乗り越えた経験を力に変え、それぞれの未来へ向かって新たな一歩を踏み出してほしいと願っている。